

COLUMN

連載 94

仕事について考える

札幌大谷大学社会学部  
教授 平岡祥孝

新年も早一ヶ月近く経ちました。何とか寒い冬を過ごしていきたいものです。

最近、道内の各高校に出張講義に出向くことが多くなりました。要するに高校生に講話や講義をする大学の地域貢献事業だと、考えていただいて結構です。私学人生の黄昏を迎えて、多感な青春時代の真っ只中にいる高校生と勉強できることは、ある意味幸せです。

昨年暮れにある高校で私の講義を受講していた1人の女子高校生が感想を寄せてくれました。彼女は、卒業後の進路として就職を希望していました。「勉強が嫌いなので、進学はしない。そのかわりに就職したい」と考えていたそうです。しかし、「進学しなくても、なぜ勉強しなければならぬか、その理由が分かりました」と、彼女は述べていました。

進学希望者よりも就職希望者は、より一層勉学に励んで欲しいと、私は願っています。なぜならば、学校社会から職業社会に移行することは、まったく世界が変わるからです。卒業後直ちに仕事生活を送る上での「自分づくり」の時間は、高校時代が

最後となります。

私はその講義において、「高校での学びは仕事の基盤になる」と話しました。なぜ仕事の基盤になるのか、具体的に事例を挙げて説明しました。そのとき挙げた例をいくつか紹介したいと思います。仕事に就くためには、もちろん社会常識やビジネスマナーも必要です。ですが、基礎学力が極めて重要であることを忘れてはいけません。そのためには、日本語の読解力・文章力すなわち国語力を伸ばすこと、および数字に強くなることすなわち数と式の力を養うこと、を伝えました。ただし全受講生に伝わったか否かは、神のみぞ知る。

職業生活の道に進めば、就業規則、業務マニュアル、契約書や発注書など、あらゆる日本語を読んで理解しなければなりません。また、企画書、提案書あるいは報告書等々、自ら作成しなくてはなりません。また、数字が重要視されます。たとえば企業は売り上げや販売数、あるいは原価計算や利益率など、至る所で数字に出会います。数字で考える。

コミュニケーション力も鍛えることが必要だと話しました。まずは集中して聞く力を養うことです。顧客の声を真摯に受け止めること、上司の指示を的確に理解することなど、耳を傾ける場面が多くなります。集中力を養成する方法は、授業中は真

剣に先生の話聞くことです。疑問点があれば、積極的に質問する。年長者と話す力を伸ばしていくも大切です。そのためには先生との会話の頻度を多くして、試行錯誤すればいいのではないかと。

学級日誌を丁寧に書くことは文章訓練になり、黒板を丁寧に消すことは几帳面さを意識することにつながります。そして家庭科の調理実習や放課後の清掃活動は、仕事に求められるチームワークの面からも役立つことも付け加えました。

これらの話を通して、彼女は毎日の学校生活が仕事の基本につながることを理解してくれたようです。職業社会を念頭に置いて、学ぶ意味を正しく伝えることは教員の責務だと思います。これは職場においても同様です。上司は単に部下に仕事を押し付けたり、指示や命令だけで動かそうとしてはいけません。部下に当該仕事の意味を十分に伝えることが肝要です。粗雑な対応ではなく、納得させてこそ生産性も上がるのでは。



【ひらおか・よしゆき】札幌大谷大学社会学部教授。英国の酪農経営ならびに牛乳・乳製品の流通や消費を研究分野としている。高校生・大学生の就職支援やインターンシップ事業に携わってきた経験から、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、仕事論、生涯教育などのテーマを中心に、講演やメディアでも活躍。



みんなげんき！

浦幌幼稚園ひまわり組・  
ちゅういっぷ組のみんな  
寒さに負けず げんきいっぱい  
運動遊びで  
丈夫なからだづくりをしています  
みんなにっこり  
げんきっこ！！



## 町長室から

昨年は世界中で自然災害が猛威をふるい山火事、ハリケーン、地震が多発して数千人が亡くなり、日本でも平成30年7月豪雨と名づけられた豪雨で200名以上の犠牲者を出しましたし、台風5個が大型のまま接近・上陸、島根西部地震、大阪北部地震、北海道でも「胆振東部地震」でブラックアウトと言う事態も発生しました。

7月初めから8月にかけて40度を超す記録的猛暑にも見舞われていきます。

昨年を表す漢字1文字は「災」でしたが、新潟中越地震などが起きた2004年も同じ1文字であり、それだけ災害が多かった年でした。

また、世界では歴史的な「米朝首脳会談」があり、TPP11が発効して世界の国内生産の13%を占め、域内人口は5億人を超えるという巨大経済圏が新たに誕生しました。

浦幌町の産業では畑作が6月7月の長雨の悪影響が残りましたが、酪農畜産関係が堅調で十勝全体の農協取扱高は

3320億と昨年に次ぐ史上2番目となり、浦幌農協取扱高も100億円を超えて十勝農業の底力を示しました。しかし、一方ではTPP11という不安も残りました。

漁業関係は総じて振るわず、特に主要魚種である秋鮭漁は空前の不漁であった昨年に続いてフースト2を記録してしまいました。

林業は素材・製材共に動きが順調であり不足感から市況は強含みです。

これまで日本の景気は1月を超えると史上最長の好景気を記録するとされてきましたが、米中経済摩擦により世界経済の後退懸念から年末年初の株式は乱高下を示しており、不安な幕開けとなりましたが、築地市場の初セリで大間のマグロが1匹3億3千万円で競り落とされたという景気のいいスタートでした。

浦幌町は今年で開町120年の節目を迎えますが、5月1日には現天皇が退位されて平成が終わりを告げ、消費税が8%か

ら10%に改訂されるなど新時代の幕開けとなる転換の年です。

浦幌町では、これまでも「常室ラボ」で企業創業を実現してきましたが、昨年旧フタバ薬局跡に開設したうらぼろスタイル複合施設の「FUTAABA」では町民の新たな交流スペースとして、更なる町の活性化の一翼となることを期待しています。

安倍首相は年頭の所感の中で『近年、若者の意識が大きく変わり地方移住への関心が高まっており、チャンスを見逃さず、地方への人の流れをもっと分厚いものとしていきたい。未来の可能性に満ち溢れた地方創生を進めます』と述べています。

年初の北海道新聞社説では「新時代への指針」と題して『浦幌町では子供の郷土教育に力を入れ、地域の将来を担う人材を育成する官民共同プロジェクト「うらぼろスタイル」が根付く。このプロジェクトに参加した

中学生の発案で町の花を使った化粧品が商品化され、販売を手がける地域商社も発足した。事業を貫くのは、若者が進学

や就職で町外に転出して、ふるさとにかかわり続けてくれること、地域は持続していけること、考え方だ』としたうえで『単純に人口増を目指しても、どこかに無理がかかる。自治体間の奪い合いになりかねないからだ。外部の人材がまちづくりにかわれるようになれば、地域の新たな可能性を見出せるのではないかと』と結んでいます。社説で断言されただけに、浦幌町が進めている方向性が間違っていないと心強く感じました。

開町120年を記念して子ども達から冬にイベントがあればとの希望を実現し浦幌町で初めて冬の花火6000発を打ち上げます。

地方自治体には人口減少問題など大きな課題がありますが、開町120年の先に見えるものは新しい時代への挑戦であり、今年を「希望と挑戦の年」としていきます。

浦幌町長 水澤一廣